

バウハウスに関する研究

その6 創立100年記念に制作された映画から学ぶこと

終身会員 ○ 田中辰明*

Bauhaus	創立100年	グロピウス
記念映画	ヴァイマル共和国	ハンネス・マイヤ

Bauhaus 創立100年

2019年はBauhaus創立100年で、ドイツでは各種行事が行われ、Bauhaus関連の映画も多数作られ、公共放送を通じて放映された。筆者が知る作品でも次のものがある。

1.100 Jahre Bauhaus

2.Bauhausfrauen

3.Berichte zum Bauhaus

3-1.Das neu eröffnete Bauhaus Museum Weimar

3-2.Der Stil Bauhaus

4.Die Bauhaus Geschichte in einem Foto

5.Die Bauhaus Revolution

6.Lotte am Bauhaus

7.Die Neue Zeit

7-1.Die Neue Zeit(16):Nach dem Krieg

7-2.Die Neue Zeit(26):Der Prinz von Theben

7-3.Die Neue Zeit(36):Märzgefallenen

7-4.Die Neue Zeit(46):Die Frauenklasse

7-5.Die Neue Zeit(56):Das Ehrengericht

7-6.Die Neue Zeit(66):Das Ende in Weimar

日本においても「Bauhaus100年映画祭」が開催され、次の上映があった。

- A. バウハウス原形と神話
- B. ミース・オン・シーン (原題: Bauhaus-Modell und Mythos)
- C. バウハウス・スピリット (原題: Mies On Scene)
- D. ファグス-グロピウスと近代建築の胎動 (原題: Vom Bauen der Zukunft-100Jahre Bauhaus)
- E. バウハウスの女性たち (原題: Bauhausfrauen)
- F. マックス・ビル-絶対的な視点。(原題: Max Bill-das absolute Augenmaß)

これらの映画は殆どドイツで制作されたが、Bはスペイン、Fはスイスで制作された。2とEは同じ映画で、スザンネ・ラテルホーフ監督である。ただし、日本で上映されるものは原作の一部が削除されていた。映画はフィクションが付きものである。しかし今回制作されたものは、当時Bauhausで活躍した方々のご遺族でBauhausで初めて女性のマイスター(織物部の教授)となったGunta Stölzlの令嬢Monika Stadler、Am Hornの住宅で子供部屋を設計

し、子供の玩具を製作したAlma Buscherのご子息Joost Siedhoff]の証言があり、またBauhausに関連する財団の責任者ヴァイマルのBauhaus博物館Ulrike Bestgen館長、ヴァイマル古典財団(Klassik Stiftung Weimar)のHelmut Seemann理事長、同Wolfgang Holler理事、デッサウBauhaus財団のClaudia Perren理事長、ベルリンのBauhaus文書館(Bauhaus-Archiv)のAnnamarie Jaeggi館長らによる解説が入っている。その事からも貴重な資料と言える。

ZDFが制作した7.1から7.2は80歳になったグロピウス(August Diel)をStine Branderupがニューヨークの自宅を訪問しインタビューをする設定になっている。Stine Branderupはジェンダー問題研究家でグロピウスがBauhausでは男女を平等に扱うと言っておきながら、実際には差別をしていたということを詰め寄る。グロピウスは1919年にヴァイマルで創立され1925年にデッサウに移転するまでの歴史を語る。ここで主人公となるのがDörte Helmという女子学生である。Helmに関しては文献1においてもBauhausが建設したベルリンのSommerfeld邸のアップリケ付きカーテン製作という記録がある程度で、ほとんど紹介されていない。しかしBauhaus100年を記念した映画ではHelmを主人公とした映画が沢山作られている。非常に才能があり、問題意識の高い学生であったようである。グロピウスはBauhaus発足2年目に「女子部」造り、女子学生を分離し、もっぱら織物を学習させる。彼女はこれに抗議し、男性しか受講できないCarl Schlemmerの建築の講義に参加しようとする。しかしSchlemmerに引き釣り出されてしまう。校舎を出ると女性の裸体美を表象する彫刻が立っていた。Helmはペンキを持ち出し彫刻に帽子や服を描き、女性の裸体美の特徴を消してしまう。しかし出来栄が非常によく、感心したグロピウスが建築の授業聴講を許す。Helmは感激し、教室の最後尾で受講するというストーリーである。これなども映画のフィクションのように思われる。しかし文献2(Bauhausヴァイマル時代の教室会議議事録)によると、これは実際にあった話で、1920年5月22日午後5時30分から「芸術学校校舎前の女性裸体美を表象する彫刻に彩色した罪に対する処分」という教室会議が開かれている。議長はGropiusで、出席者は、Lyonel Feininger, Johannes Itten, Walter

Klemm, Grhard Marcks ら教授陣（マイスター）であった。映画では Helm の単独犯のようにになっているが、実際には 2 名の男子学生の共犯者がいた。そのうち Dörte Helm、Heinz Borchers は罪が重くけん責処分と共に夏学期は停学処分となっている。また映画では校長のグロピウスら幹部がヴァイマル市議会から呼び出され、Bauhaus に対する苦情を申し渡される場面がある。さらにグロピウス校長と Dörte Helm の情事の場面もあるが、これらも文献 2 に出てくる。このようにこの映画は裏付けをしっかりとって製作されたことがわかる。映画から Bauhaus は次のようなものであったことがわかる。

1. ドイツは第一次世界大戦で思わぬ敗北をし、ベルサイユ条約により法外な賠償金を突き付けられ閉塞感があった。それを打ち破るため芸術を通して改革を行うため Bauhaus が創設された。
2. 改革を行うため、湖で男女学生が全裸で水浴をする FKK(Frei Körper Kultur)を流行させた。現在もドイツ各地で行われているが、この部分は日本での上映では削除されていた。
3. 第一次世界大戦により国際連盟が誕生し、インターナショナルということが言われた時代であった。初代校長グロピウスは諸外国から優秀な芸術家を教員として招いた。
4. Gropius の夫人は作曲の大家の Gustav Mahler 夫人を横取りした、Alma Mahler であった。Alma Mahler は多くの芸術家を渡り歩き、Johannes Itten を Bauhaus に連れてきた。
5. Gropius はカリスマ性があり、第一次大戦にも将校として出兵し、多くの個性ある芸術家を纏める統率能力を身に着けていた。教員である芸術家の自由を認め各人の才能を引き出した。
6. 学生は合宿制度で、共に食事を作り、共に食事をする共同生活であった。夕方は楽器が演奏され、よくダンスが行われた。共同生活により学生同士が切磋琢磨し芸術製作能力を高めた。ただし予算は乏しく学生はいつも空腹であり、それをごまかすためにダンスが行われた。
7. 学生は世界各国から集まり、右翼思想を持つもの、共産主義者、社会主義者とまじりあっていた。ユダヤ人も多く在籍していた。
8. 単純、明快、芸術と技術の統合、大量生産を基礎とし、その思想はヴァイマルの Am Horn の住宅で結晶された。Am Horn の住宅は Georg Muche が企画し、Adolf Meyer が設計したとされるが、実際には Bauhaus の総力を挙げて製作され、これが現在のプレハブ住宅のモデルとなった。この住宅では Alma Siedhoff Buscher により子供部屋が作られ、話題となった。Am Horn の住宅で陸屋根が採用され、Törten の集合住宅、Dessau の校舎、Dessau の教員宿舎など

で採用され、世界に広まった。

9. 予備課程を担当した Johannes Itten の授業はかなり特徴のあるものであった。授業の前に体操をさせてから絵画の制作に入ることは知られていた。東洋の神秘性があり、自らは菜食主義で、精神統一のため、ヨガも行った。ヌードクロッキーではモデルに教室内を走らせ、それを学生にスケッチさせた。

10. Bauhaus の存続はヴァイマル共和国時代と一致する。当初はドイツ社会党が力を持っていたが、徐々に右翼政党が力を増し、Bauhaus は批判されるようになる。それと共に予算が減額され、Bauhaus 自体が製品を販売し、学校の運営資金を捻出する必要が出てきた。

11. ヴァイマル憲法は極めて民主的な憲法で女性の参政権を認めた。Bauhaus にも多数の女性が入学を希望した。Gropius はそれを認め、女子学生を織物部に配属した。女子生徒は工員のように働かされたが、予備課程で Itten の教育を受け、その理論を織物に生かし、素晴らしい作品を作り、Bauhaus の運営資金獲得に寄与した。それにも拘わらず、女性で初めてマイスターとなった Gunta Stölzl は織物部担当であったが、給与は男性教員に比べ低かった。

12. Bauhaus はヴァイマル市議会との折り合いが悪くなり、デッサウ市に招待され、1925 年に移転し、デッサウ市立学校となっている。デッサウ市には航空機メーカーの Junkers 社、国策大化学メーカーの IG Farben 社があり、大工業都市であった。Bauhaus がデッサウ市に呼ばれたのは人口増による市の住宅不足が理由であった。

13. Itten はヴァイマル時代に退職し、Bauhaus の表現主義の色彩は弱くなり、構成主義、機械重視への転換が行われた。

14. デッサウ時代にはテルテンに集合住宅が作られ、片廊下式集合住宅は後世の集合住宅のモデルとなった。この集合住宅では Junkers の自然循環温水暖房が行われた。当時住宅の暖房はカッヘルオーフェン (Kachelofen) が主流であったが集中温水暖房の採用は画期的であった。しかし、設計面、施工面での配管径の間違い、配管の勾配の間違いで暖房が機能しないものもあった。これも Bauhaus が非難される原因の一つとなった。

15. ナチスは Bauhaus をドイツから追放することには成功したが、Bauhaus の精神は特に米国で生き延び、現在に至るまで世界に大きな影響を与えている。

参考文献

1. Magdalena Droste, Bauhaus 1919-1933, Taschen
2. Meisterratsprotokolle des Staatlichen Bauhauses Weimar 1919-1925, Verlag Hermann Böhlau Nachfolger Weimar
3. Die Siedlung Dessau-Törten 1926 bis 1931, Taschenbuch